# 被災地へ手作りひな飾り

## 震災発生2年　太田市立小児童が制作

手作りのひな飾り（手前）を仕上げる児童たち（2月22日、太田市立南小で）

### お年寄りに「心の贈り物」

東日本大震災の発生2年を前に、太田市立南小学校1、2年の児童計168人が、岩手県陸前高田市のお年寄りらに贈る「奇跡の一本松」の絵やひな飾り作りに取り組んでいる。1年生が昨年12月、「自分たちでも出来ることを」とアサガオの種を贈って以降、交流が始まり、今回は2年生も加わって、「3・11わすれないよ」と題した手紙も添えられる予定だ。

交流のきっかけは昨年11月、1年担任の鯨井文代教諭(57)がクラスの児童らに、被災地での実話を基にした絵本「ひまわりのおか」の読み聞かせをしたことだった。

多くの児童が犠牲になった宮城県石巻市立大川小学校の保護者らが、児童たちが避難を目指した高台にヒマワリの種をまいた話を知り、児童たちから、「自分たちで育てたアサガオの種を被災地に贈りたい」という声が上がった。

南小では、四つあった教育目標に「震災の被災者に思いをはせ、よりよく生きようとする子」という目標を加え、高学年の授業に被災者を招くなどしてきた。教諭らは「低学年でも『心』なら贈れる」と、一本松の切断が報道されていた陸前高田市の社会福祉協議会に、種を贈りたいと相談。同協議会が、同市竹駒町の仮殿住宅に暮らすお年寄りら約25人が交流する「お茶っこ飲み会」を紹介した。

手作りしたクリスマスの壁飾りや児童たちの写真と共に種を贈ると、満面の笑みを浮かべたお年寄りたちの写真と、「春になったら種まきするよ」といった手紙や電話が返ってきた。

「自分たちでも役に立てることがある」と、1月は手作りの鬼のお面と豆を送り、「こころの中のおにをおいはらってね」などと手紙も添えた。再び感謝の手紙が返ってきた。

「梅の花がいっぱいだと明るい気持ちになるよ。誰が？」「陸前高田のおじいちゃんとおばあちゃん！」

2月22日、児童たちは教諭の問いかけに元気よく答えた後、画用紙やはさみを使って、梅の花やぼんぼりを作り、ひな飾りを仕上げていた。1年の小野島さくらさん(7)は「津波で家族や家を流されたら悲しい。少しでもうれしい気持ちになってほしいと心を込めて作りました」とはにかんだ。

自宅を流され、陸前高田市竹駒町の仮殿住宅に暮らす菅野和子さん(65)は、いまだ仮殿住宅から出られるメドが立たない中、被災地のことが忘れられているのではと不安になる時があるという。「自分の孫より小さい子供たちが一生懸命、自分たちのことを考えてくれていると思うと、涙が出るくらい感激する」と、次の便りを心待ちにしている。